

ライフ
ストーリー

Nさんインタビュー

フラットに、ニュートラルに、一人ひとりと向き合う
—自分と他者との対話を重ね続けて

〈今に至るまで〉

【Nさん】

現在、関学の中では、学生活動支援機構事務部の総合支援センターキャンパス自立支援室で、修学支援のコーディネーターとして日々、障がいのある学生さんの支援、教職員との連携などを通して、学生さんの学ぶ権利に寄与するようにコーディネート業務をしています。厳密な所属は「社会福祉法人すいせい」になります。「すいせい」も様々な事業をしており、その一つに学生支援事業があります。学生支援事業に所属したうえで関学に来ているという位置づけになります。

関学で働くようになった経緯としては、簡単に言うと関学のホームページを見て応募しました。本当に、誰かの、何かのツテとかも全然なくて。関学に来る前は、心理畑にいて、臨床心理士と数年前に公認心理士も取りました。最初はしばらくクリニックで勤務をして、そのあとは、教育センターで勤務して教育相談に乗っていました。もう一つは、福祉ですね。高齢者福祉施設で、認知症予防の検査などをするという医療・教育・福祉の三領域で働いていました。取り敢えず、三つの現場を見ないと分かんないなと思って、その三つの現場に行っていました。

今の仕事の原点になるものとして、クリニックに勤務してた時に、大人になってから発達障害って診断される人が当時は非常に多かったということを経験しました。診断がついて、そこからその方の色々な人生の一つの分岐に成り得る様な診断って事なんだなと思って。もう少し早い段階から診断とか自分の事を分かって社会に出てたら、より生きやすかったんじゃないかなみたいなケースが結構あったので、何となくそこから大学というところに視点が向き始めました。

大学の中で出来る事はないかなみたいなのをふと思ったのと、当時友人に別の大学で「障がい学生支援のコーディネーターっていうのがあるよ」と言ってもらえたので、何となくホームページを見て応募したというのが経緯ではありましたね。

【インタビュー】

もともと、ダイレクトで大学で働こうと思ってた訳ではなくて。

【Nさん】

全くなかったですね。勿論、大学の学生相談のカウンセラーというの的心理士がやってるんで、そこも気にはなってたんですけど。

大学生を対象に何かしたい、何となく漠然と、世に出る最後の教育機関として、関心があってという感じ大学に行こうとなりました。

【インタビュー】

そもそも心理の分野に行こうと思ったのは、何か理由があったのですか。

【Nさん】

明確に何かあるって訳じゃないんですけど。父親が魚、漁業の研究の仕事をしてて、自分の中で働くイメージが、興味があるところ、自分の関心があるものを突き詰めるみたいなのが、社会人のモデルやったんですね。なので、それ以外の仕事の見つけ方というのが分からなかったんですね。

一つは仕事観みたいなのが、父親が研究者だったので、そういう仕事の探し方しかなかったんですけど、別に自分は魚が好きでもないし。動物が好きかと言ったらそうでもないし。専門とか、何かあるんかなってというのはずっと考えていました。

ただ、小学校の頃に気になってたことがあったんですね。ある日、全校集会で、スクールカウンセラーの人だったと思うんですけど、「〇さんの事をちょっと説明させて下さい。〇さんは自閉症があって、この子は凄く嬉しくなると唾を吐いちゃうんです。それは汚いかも知れないけど、一応こう楽しくてやっちゃってる事なので皆さん分かって下さいね」みたいなアナウンスがあったんですね。その時に「へえ」と思ったんですね。「そんな人が、居るんだ」というのと、通訳ですよ、ある種。「理解して、通訳をする人がいるんだ」と。これは言語のレベルでは全然なくて。「そんな人がいるんだ」というのは、どこかで残ってたのもあって、そこから

小学校の時に「じゃ、心理や」と思った訳じゃないですけど。中・高、それなりに過ごして大学行くなっていった時に、何かふとこう社会人みたいなのを考えたら、特別支援教育、福祉という分野が、何となく近かったんですね。

また、もともと相談されやすいタイプだったので専門的に相談とか乗れたら良いかなというところもあって、心理に行こうかなってなった感じですね。

【インタビューー】

何となく、相談受けやすい。話しやすいっていう感じ。

【Nさん】

相談を受けやすかったり、間に挟まれる事が多かったんですね。なので、コーディネイトみたいなことをしてたかもしれないです。心理職を目指す前からも、結構、「こっちの話はこっちの話」、「あっちの話はあっちの話」みたいに元々、「この人の話は、この人の話」っていうふうに話は聞けてたんやなと思います。「いや、そんな事言っても」みたいに、口を挟まないという様なスタンスはあったかもしれないけどね。

〈仕事の中で大切にしている「フラット・ニュートラル・俯瞰」〉

【インタビューー】

実際に仕事や業務をしていく中で大事にしてる事、沢山あると思いますし、心理職としてというところと、個人としてというところ、どちらもあるのかなと思うんですけど。

【Nさん】

業務の中で大事に、常に意識してるのは、「フラット・ニュートラル・俯瞰」、この辺なんですよね。あんまり、入り込み過ぎないというか、と

にかく主語はあなた、ないしは、あなた達というので、人の話として。でも勿論、突き離す訳でももちろんなく、最大限、一生懸命聞くんですけれど。あくまで、あなたの感じてる事、あなたが思ってる事、楽しい、苦しい含めてですね。自分は出来るだけ、その評価を含めずにニュートラルでいるというのを意識しています。勿論ギアが1に入る時も2に入る時も3に入る時もあるんですけど、必ずすぐにニュートラルに戻れるようなというイメージ感ですね。表現が難しいですけど。偏見がない訳では勿論ないんですけれど、できるだけ先入観、偏った見方みたいなのをしないように凄く意識はしてるかも知れないですね。なので学生・教職員と接する時も、「あくまであなたの話を」というのでとりあえず聞いて、咀嚼は後みたいな感じですね。

【インタビュー】

それは、最初からずっと出来ているものなのか、それとも色々経験を経て身に付けていった感じですか。

【Nさん】

そうですね。個人的にはやっぱり、例えばアドバイスが欲しいと思ってお話をして、アドバイスくれるなら良いんですけど、何も求めてないのに、アドバイスされてもやっぱり嫌じゃないですか。だから何でしょうね、そこを測れる人間になりたいなと思ったんですよ。

というのと、さっきもちょっとお話した、何となく間に挟まれる事が多くて。色んな人から色んな相談を受けてると、いちいち自分の価値観だけで切っていくいけないので、出来るだけニュートラルにいれる方が楽って思ってたのかもしれませんが、分かんないですけど。元々そんな聞き方が出来たのと、後はカウンセラーのトレーニングで、自分の感情もしっかり俯瞰をするというのと、話をしてる間にどれぐらいの距離間になってるのか。しっかり、俯瞰出来るようになりましょうみたいなトレーニングがあるので、そこもあってかも分かんないですけど。

元々ね、タイプの的には研究者とか言いましたけれど、一点突破というよ

りは、出来る限り多分、平均 40 点ぐらいを取っていくみたいな。オールラウンダーでいたい、みたいなものがあるかもしれないですね。ちょっと 40 点低いですけど。

〈偏見への自問自答〉

【インタビュアー】

先ほどですね「偏見が、無い訳ではないけど」と言っていたと思うんですけど、偏見が、無いと思っているパターンで偏見バチバチにあるって、ありがちなのかなって思うんですけども。その辺りは、どういうふうにして偏見と向き合っているんですか。

【N さん】

そうですね。偏見が無いと思うというのも、恐らく、無いってあり得ないと思っているので。自問自答が多いかもしれないですね。ふと、何か誰かの印象を受けた時に、「でもそうかな」みたいな。すぐに、問い直すじゃないですけど、「いやいや、話してみな分かって」とか。「いや、そうじゃないかもよ」とかね、1 人でやってるのかもしれないです。

【インタビュアー】

パッと思いつく思考みたいなものに対して、それをパッと口に出さずに、ちょっと一旦考えるみたいな。

【N さん】

そうですね。後はその、これも偏見で動いているって結果的になっちゃうかもしれないですけど。例えば、強面の人がいて、きっと周りから敬遠されてそうな、そうだなという、偏見かもしれないですけど。そういう人がいた時に、大多数の人とは違う動き方を僕はしたくなるんですよね。だから、みんなが怖がってたら、みんなと違うちょっと近づいてみたりと

か。

独りで居たくて、居てるかも分からないですけどね。上手くいってなさそうだったら、大多数の人はきっこう動くから、自分はちょっと違う見方をしたいとか、しなきゃなとかいうのはありますね。これは心理のトレーニングとも関連しているかも知れないですけどもね。(心理は) 大多数の人が、見る視点とは違う視点を、光を当てるという職業なので。その視点は、もしかしたら普段の言動とか行動にも出ているのかも分かんないですね。

【インタビュアー】

心理職って、そういうトレーニングもあるんですね。

【Nさん】

そうですね。でもそれは、個別のスーパーバイザーからの話とかもあるので、みんながみんなっていう訳じゃないかもしれないですけど。例えば、ケースカンファレンスとかもあるじゃないですか。ポジショントークになるかも知れないですけど、ケースワーカーの見方としてはこうだし、教員としてはここを育てていくし、心理だったら、心理の立場で支えていくっていう。他職種連携の所の一つかも知れないですけど。他職種連携の同職種版みたいな。同じ界隈の仕事の人でも、「みんなはそう思ってるけど、ほんまにそうなんかなあ」とか。違う視点で見たい、みたい。

できているかどうかは別として。意識レベルでは、このまま行って良いのかなとかというのは常にちょっと思う様にはしてますかね。即断・即決・行動派という感じでは、多分ないと思います。「いろんな意見を出して考えた方が良くない？」というのはあると思います。

〈他者への想像力とニュートラルでいること〉

【インタビューー】

ジェンダーやセクシュアリティの事って、対人援助職の教育課程の中でしっかり学ばなかったりする事もあるかなと思うんですけども。そういうのを学ぶ機会というか、あるいは、実際に初めて当事者の人に出会った時にどんな感じでしたか。

【Nさん】

そうですね、初めて会ったのは、直接、本当に会話交わしてどうかではないですけど、中学かな。カミングアウトされた訳ではないのでね、ちょっと怪しいんですけど。中学の時にいつも、手を繋いで仲良くしてる女子2人が居てたんですよ。女子という表現は、端から見たらというところではあるんですけど。他の人とかは、「あの2人、多分付き合ってたんで」とか。クラスでも結構、噂になってるんですよ。でも、それを「あっ、そうなんや。へえ」みたいな感じでしか思わなかったんですよ。その時は本当に、ふとそう感じた。その時の感覚で、「そんなひそひそ言わんでもいいのにな」とか。「別に、手繋いでてもええんちゃうん」とか。「同性で手を繋ぐって、別にあるやろうな」とか。その、性的な意味であろうがなかろうが「何か、なあ」みたいなのが、周囲との最初の反応の違いみたいなが多分あったのは覚えているんですけど。

直接話すのはキャンパス自立支援室に、勤務をし始めてからなので。感覚的には「別に、そんな変なんかなあ」という気持ちがあったぐらいなんですよね。後は、直接、当時の学生サービスセンターで話を聞いていたら、そりゃ名前一つ呼んでもらう為にも申請しないとイケないっていうルールを知っているの、申請してもらわないとイケなくてとか、何か大変だろうなあと言ったら、すごい他人事の様に聞こえちゃうかも知れないですけど。「ワンクッションあるってしんどいよね、手間だよな」というのは、ふんわり思ってたみたいな感じですかね。

そんな大きな衝撃とか、何か反抗的な気持ちも、かといって、すごく

肯定的な気持ちもあんまり、すごいインパクトは特にはなかったというのが正直なところですかね。

【インタビュアー】

それこそ、フラットでニュートラルなところですかね。

【Nさん】

そうですね。中学の時の感覚は、今はもうこのフラットでニュートラルというのが、腹というか身体でやっているもんなんかも、正直分かんないですけど。中学の時の感覚って、「自分は心理職なんだから、こう理性的に振る舞わなければならない」なんて、一切考えてないので。その時の感覚って、多分、ほんまなんやろうなと思うので。そういう意味では、割とニュートラル寄りやったのかも知れないですね。

【インタビュアー】

その時に、こう周りの反応との違いも含めて、色々感じはったという事なんですね。

【Nさん】

そうですね。でも、周りを見る癖というのも、結構転校が多かったのも、それもあってかも分かんないですね。新しく転校した先の環境とかすごく見るので「あっ、結構、噂話が多いんやなあ」とか。ここで自分は生きていけるかを観察していたというのもあったかも知れないです。

【インタビュアー】

ニュートラルに接するってすごい難しいですが、それが心理職以前のところですよ。

【Nさん】

あるかも、分からないですね。だから人に対して、何でしょうね。平和

ボケしてるかもしれないですけど、話せば分かるというのは、多分ずっとあって。裏を返すと、話してみないと、その人の事分らないしなのというのは常にあるかもしれないですね。

〈病名・診断名よりも「何に困っているか」〉

【インタビュー】

トランス学生との出会い、その辺りは、どういった。

【Nさん】

当時は、割ともう「私、性同一性障害っていうふうに診断されたんですけど、どうしたらいいでしょう」みたいな。もう、はっきり自分で性同一性障害と明言をする学生さんが割と居てたんですね。はっきり表明してくれていたの、そこは一旦、精神科で診断をされているので。じゃあ、障害学生のフローとして、というところで話は出来るんですけど。必要以上に、何か難しく考えていなかったのかもしれないですね。障害学生であろうが、障害学生でなかろうが、そのセクシュアリティに関連する事項であろうが、なかろうが、「とりあえず何に困ってて、どうなったら良いと思うかな」というところにしか、多分フューチャーしていないので、やりにくいとかいうのはあまりなかったですかね。ただ、難しさというところでいくとね、「名前を呼んでもらうのに手続きいるんやな」とか。煩雑な手続きが色々あるんやなというのはありました。

一番最初に、仕事というところで担当して衝撃だったのは発達障害なんですね。教科書で読んでいる内容が「ほんまなんかな」と思っていて、全然出会った事がなかったんですね。最初に出会ったのは教育センターの時で、「こんなに、動き回るんだ」とか、いわゆる多動の子どもと出会った時には、「そうか、そんなにハイパーアクティブってこういう事なんだ」みたいな。既存の子ども枠「子どもってこんぐらいかな」みたいなイメージが、その時に壊れたのはありましたけど。大人、大学生以上と接するに

当たっての、難しさみたいなのは無かったですかね。

【インタビュアー】

本当に、どんな学生でも、変わらない関わり方をされているのだろうというふうに感じますね。

【Nさん】

そうですね。何か、それこそ印象とかがね。こういう時に、喋れた方が多分、良いんでしょうね。こういう学生さんと出会って、こんな価値観でみたいなのが、綺麗なストーリーやと思うんですけど、あんまりね。

【インタビュアー】

でも、必ずしもそれがある訳ではないですよ。

今って、勤めてから何年目ぐらいでしたっけ、変化とかもあるんですかね。

【Nさん】

2015年に、僕は着任をして、今でちょうど10年目になりますね。

ここ最近は、障害者差別解消法に則った合理的配慮の提供っていうのが、かなり前面に出ているので。今の支援室の方では、勿論（性別違和に関する）相談があれば乗りますよという感じですけれど。障害学生、合理的配慮というのが、二つが看板として前に出ているので。修学上の理由というがあるので、やっぱちょっと、障害者かそうじゃないか、みたいな感じで分けられていて。（性別違和は）そっちじゃないかなというふうな印象になっている可能性もあるかなと思いますよね。なので、相談室のカウンセラーの方には、色々な相談の中には割とあるかも知れなそうですけれど。なので、最近性別やセクシュアリティに関して学生と相対するっていう機会はかなり減ってるかなと思いますね。

〈マイノリティへの想像力〉

【インタビュアー】

これまで、学内外問わず活動というか、その研修の受講みたいなのところも含めてですけど、どのような事を。

【Nさん】

研修も関心はありつつ、よく隣で同僚が他大学で講演するのでっていうので、おさらいとして見せてもらったりとか。勿論、すいせいの中で、研修などは受けています。ただ、関心はありつつも、自分が活動に従事をしたかという、それは全然ないんですよね。もう少し広く色々な相談を受けられるようになりたいという動機があるので、すごく、関心はあるんですよ。ただ、みんなで一緒に活動にコミットできているかと言ったら、今はまだできてなくて。間接的に、色々な話を聞くに留まっていますね。なので、この話を受けるにあたっても「僕、何もしていない。関心は確かにありますけど、そのレベルで良いですか」というところなんですよ。

【インタビュアー】

組織の中で、他のメンバーが活動するところを裏で支えていたりもするのかという感じがある気がします。

【Nさん】

そうですね。今はどっちかという、管理側の立場になってるので。

現場での話の聞き方とは、また全然違う動きにはなっています。「したらみんなが働きやすくなるのか」、「目標管理をどうするか」とか、そういうところに視点を置かざるを得なくなっている。ある意味、新鮮ではありますけど。

今は、そんな大きい事は言えないですけど、昔は、世界中の人と知り合いになりたいなみたいな事を思っていた事があって。ただ、言語なんかできないです。でも、人に関心は元々あったやろうと思いますね。な

ので、色々な活動への動機とか関心はありつつっていうところですね。

【インタビュアー】

それは、セクシャリティ以外のところでも、色々なマイノリティへの課題に関心を持っているっていう感じなんですかね。

【Nさん】

そうですね。最近ね、あの私事でいくと、1歳2ヶ月とかになる子どもの子育てをしてて、一瞬待機児童になったんですよ。待機児童問題から児童に関する事とかにも少し関心は出てきました。で、そうすると今度は子ども・家庭の事を考え出して、シングルマザー・シングルファーザーとか、親亡き後とかのことに今度は視点が行ったりもしますし。

学生というところと、ちょっと離れるんですけど。色々なところでいわゆる大多数じゃない状況で生きてる人って結構、身近にも居るんだろうなというのは、何となく思いを馳せるようにもなりましたかね。つついね、自分も家庭の事だけ見てたら、結構それはそれでバタバタしてて大変なんですけど。この子が、先どうなるのかなとかはあるんですけど。

本当に、子どもの相手っていうところでいくと。ワンオペって、大変なんで、ワンオペのところって、大変だなとか。そういうところを思うと、社会課題というふうに関心というか、思いを馳せるようにはなりましたかね。単身親とか、親がない家庭とか、何か家庭っていうところは関心ごとの一つのキーワードかもしれないですね。

【インタビュアー】

大多数じゃない人達、マジョリティではない人達のことを考える時に、人によっては、自分のマジョリティである立場みたいなもの考えることで、居心地の悪さみたいなものを感じる反応って、時々あったりするかなと思うんです。だからマジョリティである事への、嫌みたいな感覚とかってそういうのは全然感じはらへんというか。

【Nさん】

そうですね。どうでしょう、ちょっと良いかどうか分からないんですけども。大多数であるか、少数であるかっていうところに多分、あんまり関心がないのかもしれないですね。いや、もちろん少数なので、そこでの困り事とか、どうしたらええかなみたいなことにも関心はあるんですけど。そのマイノリティゆえの困り事とかはあるので、マイノリティっていうことを意識してみるっていうのは大事かなと思います。

ただ、大多数であろうが少数であろうがっていうことは、もしかしたら自分の中には大きな関心事ではないのかもしれないですね。大多数の中にいる、何かで困っている人がいれば多分、関心はあるでしょうし。だから、個人にしか、もしかしたら目が向けられてないのかもしれないですけど。

【インタビューー】

それ大事ですよ。ラベルで人を見ない事にも繋がるのかも。

【Nさん】

ああ、そうですね。それは、あるかも知れないですね。

個人というところと、あとはやっぱり周りの反応。中学の時のエピソードもありましたけど。どこやったかな、前から見たら背が高めの男子学生さんかなと思ったら、後ろから振り返ったら髪の毛結構長くして、スカート穿いてたんですよ。なので、長髪スカートを穿いた学生さんかなみたいな子が、こう階段上がって行ったんですよ。それを、他の学生さんが見ていて、後ろから指差すではないですけど。何でしょうね、その反応の方に僕は気が行くというか、「どういう事を言ってたんかな」っていうのが結構気になったっていうのはありますね。勿論、何か声を聞いた訳ではないので、僕の思い込みかもしれないですけど、「何か変な人が歩いているな」っていうふうな雰囲気になんとか見えただけかな。そんな事は言わずに、ただただ居ただけかもしれないですけど。その当該学生さんとのエピソードっていうよりは、その人に相対した第三者の反応を気にしてしまうっていう感じですね。周りの反応に対して、「別に気にしな

くてもいいのにな」「別に何か危害を加えてる訳でもないのに」とか、そんなことを思っちゃうかもしれないですね。

〈個人と組織、ギャップ〉

【インタビュー】

個人と組織の間でギャップがある時もあるのかなって。あんまり答えにくいかもしれませんが。

【Nさん】

支援室の中で工夫できる事があって、それを事務方に相談をして、じゃあそうしていきましょうみたいな感じなので、割と、意見を吸い上げてもらいやすい環境ですね。そんなに違和感はないかなと思いますかね。

理念とか考え方含めて障壁除去っていうところだけでいくと、キャンパス自立支援室っていうのは専門家かなとは思うんですけどね。何が社会的障壁なのかというところから聞き取りをしたり、「できればそれ取っ払いたいよね、何かないかな」っていうのが、支援室の役割なので。

だから、性別違和・性別不合の相談っていうところだけでいくと、その枠組みに乗っていく力はあるんだろうなとは思うんですけど。さっきも話したように、今は障害学生、障害のある学生の修学っていう部分が、最初に出てしまっているところを、どうぼかせるかなということは考えています。でもこれだけ大きい大学の組織体として銘打ってる中で、そこをぼかしたからって、相談しやすくなるのかっていう訳ではないでしょうし。まだまだ本当は困ってるけど、相談もできずみたいな学生は多分いるんだろうなと思いつつ。でも簡単に、障害学生支援っていうのを消しましょうっていうのも、明日から消せる訳ではないですし。また、いわゆる障害学生もまだまだ声や手を挙げられてない、障害学生へのリーチがまだ全然できていないという実態があるので、そこをぼかして広くして本当に良いのかみたいな。ちょっと正解が見えないところではあるので。もうちょっとね、広く

相談って受けられたら良いんだろうなと思いつつ。でも実際に、どんなアクションしたら良いんだろうなっていうのは、結構、日々考えるところではありますかね。

【インタビュー】

難しいですね。やっぱり相談しづらいて言われたりとかって、学生さんからあったりするんですか。

【Nさん】

そうですね、でも、どうでしょうね、勝手に思ってるだけかも知れないですね。結局、完全に社会モデルに振り切った障害観が世に浸透してたら、障壁に直面してる障害がある学生なのでお願いしますっていうので、保証人も大学も、当該学生さんもそう思ってたら多分、どんな困り事でも相談には来てくれるんだろうなと思うんですけれど。なかなかやっぱり、「害がある」、「害である」みたいなところの認識があると、それこそ精神科の通院もやっぱりハードルが高いついていうのは、やっぱり未だに聞くので、その障害のある学生の修学支援の部局っていうふうに書いてることで、二の足を踏んじゃう学生さんは本当にもう色んなところにいるんだろうなっていうのは思いますね。

【インタビュー】

そうですね。個人モデル的な考え方を、社会もそうだし、本人もその内面化していきますよね。

【Nさん】

そうですね。やっぱり医師にかかるっていう時点で、医学モデルでの診断、医学モデルでまず見られるところを通ってくるので。曇ってるフィルターを通った後で、来るっていうところはあるでしょうね。

【インタビュアー】

あまり分からないんですけど、支援をするにあたって、基準みたいなものってあったりするんですかね。本人の困り事っていうところだけではなくて、やっぱりそこで診断書とか意見書というのはやっぱりセットで求められるんですかね。

【Nさん】

そうですね、そこも変わりつつあるんですけど。社会的障壁は我々で聞き取りはできるんですけど、現状では、機能障害があることが障がい者であるという考えをしているので、一旦基準っていうところでいくと機能障害の証明が求められます。多くは、診断書とか意見書になるんですけども。それこそ検査の結果の方が機能障害の根拠足り得るんですけど。例えば、診断書も服薬中・通院中ですっていう診断書ペラ1枚よりも、やっぱり検査所見の方が機能障害を分析するには良いんじゃないかっていう意見もあります。現状では、やっぱり診断書・意見書・手帳のコピーの提出となっています。なので、ひとまず医療を通らなければならないというフローになっちゃっているんですよ。

【インタビュアー】

それって、本人は今まで医者にかかった事ないけど、困り感があって、辿り着くとか、あるいは教員から質問くるとかもあったりはするんですよね。

【Nさん】

それはありますね。支援室の場合は、授業や試験に関する環境調整がスタートになります。本当に困り事の内容にはよるんですけど、アプローチとしては、自分で出来る工夫を増やしていくっていうボトムアップもありますし。だからそこに関しては、相談室のカウンセラーに「じゃ、工夫を一緒に考えてもらえる人のところ行こか」って言って、繋ぐ場合もあります。

現状での障害学生の定義では、機能障害プラス社会的障壁というのが現認される状態であれば、合理的配慮というのが申請出来るよというフローにはなるので、学生さんにはそのような説明をしています。でも教員からは「なかなか授業来てない学生が居るけど、どうしよう」とか、「学生さんから、こんな相談受けたけどこう言っちゃっていいのかな」とか、「鬱の配慮が出てるけど、どう接したらいいんだろう」とか、「あんまりこう、いけいけどんどんで声掛けない方がいいですよね」とか、「穏やかに喋った方がいいかな」とか色んな相談は教員からは来ます。

【インタビューー】

Nさんとしてでも、やっぱり現状のあり方というところは、本当はこうだったらいいのになというのは何となく持ってはる。

【Nさん】

そうですね、現状に凄く不満であるという強いものはないんですけど。何でしょうね、俯瞰した目になっちゃうんですけど、一つの社会福祉法人が大学と協同して、学生さんが学びやすく、そして就職活動を自分らしくやっていけるようにというという状態なんですけれど。これが障がい学生、現状の障がい学生支援だけをやりますという場合だと、そんなにもう要らなくなっていくとは思うんですよね。教職員の理解もこう深まっていったりとか、合理的配慮じゃなくて、そもそも環境整備で、我々が調整しなくてもいいようなユニバーサルな大学に少しずつなっていくので。

そうなってくると我々の役割って、もっとね、やっぱり色んな事を広く、困り事にリーチ出来るような人間が育って行って、そういう集団になっていないと、社会福祉法人が入る意味ないなというのは、法人内部の考え方としてはあります。現状すぐとか、数年後にはこれをやんない事にはとかならないんですけれど。現状の事を何かルーティーン的にこなしてるだけだと、やっぱりよろしくないの。現状では修学というニーズだけなんですけれども、色んなニーズ、修学以外にも困っているところにできることはないのかな、というのは、ちゃんと意識として持っておかないと、と思っ

ています、せっかく我々も入っているのですね。

「分かった気にならない」というアライのあり方

【インタビュアー】

対人援助職として大事にしている事と、アライとしてどう結び付くかとかってあったりしますか。

【Nさん】

そうですね。多分かなり、共通してるかなと思います。勿論ね、活動にちゃんと従事してるかと言ったら、してないという自信のなさもあるんですけど。でも、何でしょうね、分かった気になったらもうその時点で終わりやと思うんですよね。勿論、勉強は必要やと思うんですよね、一定の知識ですよ。まずは、色んなインプットのレベルで知らないと、引き出しは増えないので。でも、インプットで頭でっかちになっちゃって、インプットしたら今度当てはめが出て来ちゃうというか、必要なプロセスかもしれないですけど「あっ、この人」ってなっちゃう。それこそ精神科に勤めてた時には、「この人はじゃ鬱かな」、「この人は不安っぽいな」って。一旦、ラベリングをしない事には、その人の背景が分からないところもあるので、入口のラベリングというのは、悪くはないとは思うんですけどね。でも、それだけが全てになっちゃう、それだけで終わっちゃうとよくないだろうなと思うので。大事にしてるのは、分かった気にならないというところですかね。もうちょっと、分かっているといけないという気はしてますけど、大事にしてるのは、何でも分かった気にならないというところもう1択ですかね。

【インタビュアー】

大事ですよ。分かったって思えたら、楽なんですけどね。そこで、居心地の良さを求めないというか。

【Nさん】

そうですね、分かった気にならないっていうのと、後は、とにかく意思疎通するということですかね。お互いに何かを伝えなければ伝わらないし、伝えてもらわないと分からないということですかね。事例が増えてくると、「きっとこれだろうな」、「これで上手くいくだろうな」、障害学生支援のところでも、「きっとこういう診断があったらこういう授業でこう困るから、こういう配慮があって、先生とこうしたらいいだろうな」みたいなのは、他のコーディネーターも皆分かってくるんですけど。もう少し個別にね、フローに乗っけるだけじゃなくて、一個人を分かった気にならずに、どうなんだろうというのは視点と持っているだろうなとは思っています。それは、多分どんな領域、業界でも「じゃ、このフローですね」「この薬だけ出しときますね」というよりは、「あんたは実際ほんでどうなん」というのは、もちろん業務上となるとマンパワーとか業務時間とかというのが絡んでくるんですけど、一旦それは取っ払って、話していく。だから話す事を止めないというのが凄く大事なかなと思いますね。

それも一方的に、こっちだけが、話をしたいと思ってても、相手あっての事なのでね、相手にもやっぱり話をしてもらえるように、もらいたいというふうに立ち振る舞う必要があるのかなと思うんですけど。

【インタビューー】

相手の人に何か話してもらえるようにというので、何か工夫している事とかってあったりしますか。

【Nさん】

そうですね。業務の中でいくと、学生さん、保証人と話をするという時には、学生さんにはとりあえず部屋にまず来た事をまずピックアップをする。「よう、来てくれたね」とかね。「来て偉いね」となると、子ども扱いしてる感じもあるので、「よう来てくれたね」というのと、後は、言葉の選び方ですかね。敬語、丁寧語で喋る方が心地いいか、ちょっと砕けた感じの方が安心するかというのは使い分けたりとか、後は、喋る間ですかね。

一気に喋っちゃうと向こうも圧倒されちゃうので、キャッチボールのテンポも、ちょっとゆっくり目の方が良さそうだったら、ゆっくり目にしますし。とにかく反応を凄くよく見るというところですかね。後は、自分で困り事を表出しにくい学生さんも多いので、ああかな、こうかなと聞いてみてとか。こっちが具体的に色んな事を呈示して進めていくというのもありますけれど。とにかく、よく見る、よく聞くというところに終始するかもしれないですね。

よく見る、よく聞く為にはやっぱり凄く関心を相手に向けないといけないので、「普段どうしてるのかな」とか、「ここに来るまでどう考えてたのかな」とかを、思いをどんだけ馳せれるか、シンプルに、関心っていうところかなと思いますけどね。

【インタビュー】

あのアライという言葉の受け止め方って、そうですね先程の話とも重なりますが。この質問入れたのが、名乗りにくさとか人によっては、必要性とか、何か名乗りにくさもそうですし、どの位の基準になったら名乗っていいのかとか、そういう事を結構、悩まれるっていう声を聞くんですけど。

【Nさん】

そうですね。割と関心もありつつ。多分、やっぱり活動従事不足から来るところやと思うんですけど、やっぱり自然発生的に、お互いの事が分かって、違ってても別にええんちゃうとかを学生さんが思えたりとか、意識が変わっていくみたいになればいいですけど。中々そうならないので、名前を付けたりとか、こういうイベントをやります、まずは分かりましょねっていうふうに、意図的にしていかないと、啓発がなされていかないというのが大いにあると思うので、重要だろうなと思います。

受け止めとしては、凄く関心があって、色んな人と関わって、接して分かっているという気持ちがあるくらいでも名乗っていいのかなっていうのは、ちょっと思ったりしますね。定義としてはね、色んな活動に従事しているとか、活動に従事というのが1回行ったらオッケーなのか、活

動の従事というのは何かとか、啓発してたらオッケーなのかみたいなのはあるので。ちょっと行動には起こせてないというところが僕自身の負い目ではあるんですけど、やっぱり関わりを持ったりとか、フラットにとかという意識は恐らく、アライ足りえるんじゃないかなと。そこだけは、自負しているんですけども。

【インタビュアー】

そうですね、行動って色々な次元であると思いますし。目に見えるような大きい活動だけが活動じゃないだろうなと思ってて。それは、日々の実践自体が、やっぱり大事なのかなと思うので。

【Nさん】

はい、救われました、その一言で。そう言ってもらえたら、本当に有り難いんですけど。

〈今後の展望〉

【インタビュアー】

今後の展望みたいなものはありますか。

【Nさん】

そうですね、支援室というところでいくと、管理側にはいるので対学生というよりも、一緒に働く人が自分の部署に来たからには、この部署において良かったって思ってもらいたいと思うんですよね。それは勿論、業務のレベルもあるでしょうし、働く人間関係っていうところもあるでしょうから、漠然とはしていますけれど、そこについてはかなり意識を向けています。多少の嫌な事はあると思うのですが、「ここにおいてもええかな」とちょっとは思ってもらえるような働きかけは、広くその仕事というところでは持っているところです。

関学の中でいうところは、もうちょっと教職員のサポートというか、教職員の困り事へのリーチというのをもうちょっと広げていきたいなというのと思っていますね。それはもう本当に、あらゆる困り事ですね。セクシュアリティに関するものもあるかもしれませんが、学生対応というところもあるかもしれないです。学生を支えるにあたってっていうところで、教職員には広く学生対応というところで何か寄与できたらいいかなというのと思うところですね。

あとは、アライとして関わりたい。もう関わりたいって思った時点で、これ僕が言うのも本当に変なんですけど、関わりたいと思いついたら、もうアライでいいんじゃないんですかって自分を守る為にも言いたいです。

【インタビューー】

アライのハードルが高すぎると何かかえって、ちょっともう触れられないかなくなってっちゃう。

【Nさん】

そうですね。何かの資格のようなものでもないですし、関心を持って、一緒に穏やかに過ごしていけたらいいよねのマインドがあれば、いいのかなというふうに僕は思ってるんですけど。ここは全然煮詰まってないところではありますし、まだまだなところがあります。ただ、皆と仲良くしたいという気持ちがあれば、十分なのかなと思います。どんなマイノリティであれ、どんなマジョリティであれとは思いますがね。ちょっと、まとまらないですけど。

中核的なお話が多分できてないような気がするんですよね。裏面的な話ばかりになってね。申し訳なかったんですけど。

【インタビューー】

いやいやいや。最初に仰られた、フラットでニュートラルで俯瞰するっていうそのスタンス的なところが、やっぱりあれば良いのかなというの聞いてて。

【Nさん】

ありがとうございます。でも、俯瞰する人間ばかり居てもやっぱり何も進まないの、やっぱり何か突き進むとかね、旗振るみたいな人と僕は、相性がいいんだろうなとは思うんですけどね。

オールラウンドに 40 点取れても、多分単位落とすだけなので、やっぱり 60 点以上、100 点 1 個でも取れるみたいなのが多分いないと、チームとしては破綻しちゃうというのがあるのですね。

【インタビュアー】

管理側だからこそ、そういう事もきっと色々考えてはる。

【Nさん】

そうですね。立場がそれこそ俯瞰になっちゃいましたもんね。現場対応をしてる人を、後ろから支えるみたいな感じになっちゃいましたからね。

【インタビュアー】

きっと 10 年前とかだと、今とは違う感じかなと。

【Nさん】

そうかもしれないですね。でも「フラット、ニュートラル、俯瞰」は、多分ずっと変わってないかなとは思いますがね。発達障害の学生さんを支援するにあたってみたいなインタビューを受けた事もあるんですけど。その時にも似たような事、言ってたような、何一つ、変わってないような気はします。